

総評

元信州大学教授
元文部省初等中等教育局教科調査官
澁澤文隆

青春いっぱいの作文に感謝

今回の最終審査には、基本テーマ「私の挑戦」・「私の成長」が反映し、昨年に引き続き中学生らしい活力・エネルギーを感じさせる作品が多く見られました。また、内容的には部活動や趣味、仲間との交流、そして家族の絆などをテーマにして自分の生き方、考え方などを見つめる作品が多く見られました。そうした中で異彩を放ったのが福島県の星 祐成さんの「機械いじり」であり、秀逸な描写力とユニークな取り組みが評価されて最優秀賞に輝きました。幼い頃から機械器具への関心が高く、それが高じて「機械の分解と組み立て」が趣味となり、とうとうエンジンを対象に「分解する前よりも良い状態にする」ことを目指して奮闘・挑戦するまでになった成長の軌跡が、専門用語を使いながらもテンポの良い文章、豊かな表現力で綴られており、読み応えのある作品となっています。

テンポの良い文章といった点で秀逸なのは、宮城県の藤原 藍さんの「届ける、伝える」の作品です。顧問の先生の提示する難題が、心地良い働きかけによって部員の心を揺さぶり、人一倍の努力を促し、現実のものになっていく様子がリズムカルな文章で綴られており、優秀賞に選ばれました。テンポの良い文体が想像力をかきたてて行間を埋める機能を果たし、説明不足を補っていく感覚を味わっていただけだと思います。

岩手県の田中 覧宇さんの「私にとつての『俺がやんなきゃ』」は、震災時に行方不明の祖母を抱えながらも「俺がやんなきゃ」という言葉に象徴される父の使命感・取り組みに学び、今の自分を直視して心身ともに鍛錬に励む姿勢を力強く綴った作文です。今日、改めて被災地の「絆」と「自律」を味わうことができる作品であり、優秀賞に輝きました。

青森県の齊藤 栖佳さんの「ダブルSの人生」は、意欲的に取り組みたい吹奏楽部の活動と、できれば逃避したい相撲部の活動を対比的に朴訥とした文章で描写し、葛藤する思いを「体幹」をキーワードに乗り越え、活路を見出していく様子が力強く綴られている作品です。また、新潟県の高嶋 菜巴さんの「夢は逃げない」は、やりたくない演劇、ダンスを強要されるかたちで取り組むこ

とになり、ストレスを溜めながらも先生の思いや仲間との交流を通して乗り越え、葛藤から打開の道を見出していく過程を凛々しく綴っている作品です。さらに、秋田県の今仲 野乃佳さんの「伝統のバトン」は、地域の伝統芸能であるお神楽の舞姫を務めることになった経緯や心境、そして取り組みの様子を繊細に臨場感をもって表現している作品です。また、山形県の内山 ころさんの「私にできる小さなこと」は、伝統の祭りで奉納演奏をするために暑いのを我慢して伸ばしてきた髪を、演奏後に切って寄贈するに至るいきさつや思いについて、若さを感じさせる筆のタッチで綴っている作品です。

これらの作品は構成も工夫されており、いずれも優秀賞に選ばれました。なお、今回の最終審査を通して考えさせられたことの一つに作文の題名（以下、タイトル）があります。基本テーマに全面的に乗ってしまったタイトルもあれば、主張したいことを端的に表現したタイトル、個性・独自性を強調したタイトル、それを強調するあまり、やや難解になったタイトルなどが散見されたからです。書き出す前だけでなく、完成後にもしっかりと検討・吟味し、的確なタイトルを付けていただければと願っています。

いま学校は新学習指導要領の実施が迫り、主体的・対話的で深い学びをキーワードにした授業づくりが本格化しています。それは換言すれば、各生徒が個性を發揮して「協働」の活動に参画する学習場面が多くなることを意味しています。それは、授業中に自己効力感、達成感を味わったり、仲間との友情を体感したりするなどの心豊かな学習活動が、部活動や休み時間の場合だけでなく、授業の場においても実現・期待できることを意味しています。そうした場を作文のかたちで綴り記録することは、「鉄は熱いうちに打て」の諺ことわざに例えたと中学生という人生の中で最も熱い時期であり、また、スマホによる短文で思い付き的な会話が横行している今日の状況を考慮すると、大変意義深いと考えます。日常的に作文を書くことを奨励し、本コンクールにも参加・応募する風土が醸成されることを願っています。

最後に、本事業を主催、後援、支援してくださっている諸機関、関係する皆様方に敬意を表し、深甚の謝意を申し上げます。